

「種山ヶ原は今②6」

「種山高原山開き」

6月11日に向けて

今年も始まった草刈り。春先は暖かく、桜も2週間も早く咲き、農家の人達は「今年は危ないぞ」と言っていた矢先、遅霜だ。リンゴの花が霜焼けにあっただけでなく、わらび等の山菜が被害を受けた。



4月25日「風の又三郎と山桜」 里よりはさすがに遅い

種山ヶ原の草も、木に覆われた道の草は結構伸びてるのに、お天道様の当たる野原はそれほどでもない。やはり霜の被害か？

今年は4月1日の道脇の枝切りで始まった。レンゲツツジの保存もねらいの一つ。物見山駐車場の土手に咲くレンゲツツジはかなり増えたが、土手一面に咲かせたい。

文化庁指定「イーハトーヴ風景地」だけに、レンゲツツジだけでなく、自然景観を大切に、賢治の詩の世界を大切にしたい。

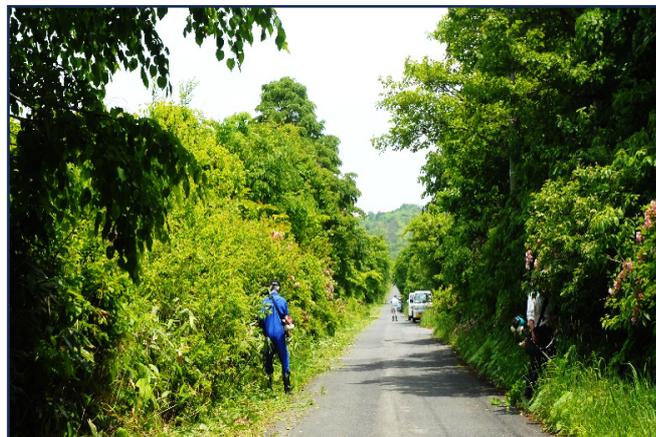
今は「ロシアのウクライナを侵略のような笹との戦いだ。耐えて守る。」

6月3日山開きに向けて草刈り開始。道路脇だけに、山野草愛好家のためにアザミ、ヤマユリ、ウバユリ、月見草等を残しながら草を刈る。懺悔：いつもハルシオン(春紫苑)とヒメジョオン(姫女苑)を刈ってしまうことだ。かわいい花なのに。刈らないと増えるんだよな。

6月4日物見山駐車場の草刈りをしていると、カッコーが鳴いた。夏が来た！6月9日9名で賢治の森と遊歩道、物見山登山口等の実施。概ね山開きに向けた草刈りを完了！遊歩道の草刈りをしている途中、ふっと蝉が飛んできた。エゾハルゼミではないか。いつも鳴き声は聞いているが姿を見たことはない。感動だ！



草刈り終了後、「風の又三郎」像の前で記念写真。今回は延29名に協力をいただいた。最高齢は85才、平均年齢80才だ。本当に感謝の気持ちしかない。㊦春リンドウとクマガイソウ





今年も東菊がいっぱい

「高原」 宮沢賢治作 1922
 海だべがど おら おもたれば
 やっぱり光る 山だったぢゃい
 ホウ
 髪の毛 風吹けば
 鹿踊りだぢゃい



くかなり前の写真。後の山は大森山>

まもなく詩「高原」の情景が見られます。昔のような牧草オーチャードではないにしても、オーチャードも混じって草原は谷風に波打つようになります。先日の山開きでは、梁川の金津流鹿踊りが披露されました。

その牧草の波が見える所は、遊歩道入口付近、北に進んで遠野側の草原と物見山駐車場下の草原です。牧草刈りは年2~3回あるので、ご注意ください。牧草収穫も面白いですが…。全て機械化！



平成 19 年 12 月 3 日記録

「種山ヶ原で草を刈った思い出」

語り手 奥州市江刺区米里字中沢

浅倉 芳吉 氏(1922 年生まれ)

当時、種山ヶ原は一面の草原で、春になれば野焼きが一斉に行われ、手入れが行き届き、草履を履いてどこまでも行けるような美しい野原が広がっていた。晴れた日には早池峰山、岩手山、駒ヶ岳、須川岳(栗駒山)、室根山、五葉山と展望が素晴らしい。

毎年、9 月 1 日は草刈りの鎌明きで、その日は朝暗いうちから準備して馬 2～3 頭を引き、いつもの草刈り場に向った。朝夕出入りには家内総出で道中安全を祈りながら手伝った。なるべく人手は多い方がよいので、馬のいない家の人を頼んだり、若い嫁さんも無理して乳呑み児を置いて出かけたこともある。先頭の親馬の荷鞍に乗り、草を束ねる縄を綯いながら行ったものだ。

4～5 日は泊りがけになるので、簡単な小屋を組み、一心に草を刈り、広げては干し、広げては干したが、丁度台風の時期に重なるので雨や霧が非常に心配であった。

朝はどの小屋からも炊事の煙が細く立ち昇り、仁徳天皇の故事が偲ばれた。当時、草丈は短く、鎌砥ぎには苦勞した。一日中腰を曲げて鎌を振るった。乾草が出来れば、束ねて馬に積んで家に運び、また翌日も繰り返した。

家までは片道 7km で 2 時間を要した。夕食後は翌日使用の馬沓を作った。当時は時計を持っている人もいないので、午後は太陽の傾きを見て判断し、行動した。

親馬と、生まれて 6 ヶ月位のまだたどたどしい仔馬も一緒に連れて行くので、道の悪い所に行くのは大変であった。種山の乾草は良質で馬の飼養には最適であった。

私が兵隊に行く前の昭和 14 年までは、毎年親父と草刈りに行ったものだ。

このような草刈りは、おそらく藩政時代から明治、大正、昭和と続いて行われていたと思う。昭和 15 年頃からは村営放牧地となり、その後だんだん山の手入れも行われなくなり、種山ヶ原の様子はすっかり変わってしまった。昔、沼辺の殿様が鴨狩をしたという大きい溜池があって、どんな日照りの時も水が枯れることが無いといわれていたが、今は土手が少し残っているだけである。

宮沢賢治先生の詩の中に、「種山ヶ原の 雲の中で刈った草は どごさが置いたが 忘れた 雨あふる」とあるが、まさに当時の実感である。

聞き手 利府 眞三 氏

五輪峠は今①

五輪街道 県道 174 昭和 31 年開通 それ以降昔の街道を旧五輪街道と言っています。

昔の小友線<小友・遠野一人首・江刺>徒歩のみ

昨秋から通行止めになっていた五輪街道が、この冬は雪も少なく例年より早く 4 月 14 日開通。

五輪峠は伊達藩と南部藩の交易で貴重な五輪街道の峠でもあり両藩の罪人返しの場でした。従って麓には番所があり、役人が常駐して藩境を守っていました。峠には藩境塚が残っています。また、この峠を越えた有名な文人も多い。特に宮沢賢治は度々訪れ多くの作品(心象スケッチ=詩)を残している。坂本龍馬の従兄弟沢辺琢磨はロシア正教布教のために函館から江戸に向う途中この峠を越えている。「遠野物語」を編集した柳田國男と資料を提供した佐々木喜善も又人首を散策し、峠を越えている。俳人河東碧梧桐も新しい俳句を求めた旅紀行「三千里」で人首で「人首と書いて何と読む 寒さかな」の一句を残し、五輪峠を越えて遠野に向って行きました。

この歴史的文学的に貴重な街道「旧五輪街道」を保存しようと旧五輪街道の保全に取り組んでいます。市・県の助成を願っています。



五輪峠の広場で、案内板の右手にある階段を下りていく。徒歩40分程で市道に。



く人が立っている所に藩境塚があり、県道造成で峠がかなり削られたことがわかる。現在藩境塚は半壊状態です。>

旧五輪街道は通行可能ですが、雨で道が少し決壊しています。この街道は40分程で市道にでます。高齢者の方で戻ることが大変な方は、下記に電話を。可能な限りお手伝いします。

賢治街道を歩く会 山崎 勝

TEL 090-5597-2340